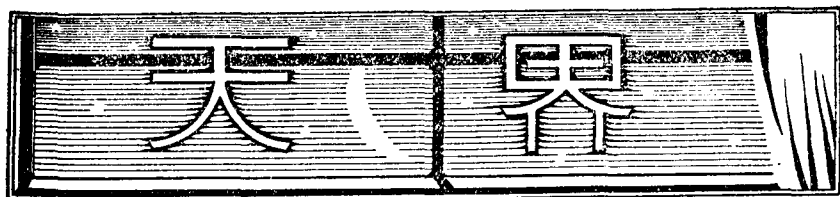


Title	ナイルの河水
Author(s)	A. B. C.
Citation	天界 = The heavens (1939), 19(217): 193-194
Issue Date	1939-04-25
URL	http://hdl.handle.net/2433/167814
Right	
Type	Departmental Bulletin Paper
Textversion	publisher



第217號（第 19 卷）

（昭和14年） 5 月 號

ナイルの河水

（A. B. C.）

今から五千餘年も大昔し、エジプトに文華の花を咲かせた人々は、其の國土を南から北へ貫流し沃野を養ふ大ナイルの水量の、毎年一度の氾濫を、出来るだけ正しく豫想する方法を色々と研究した結果、遂に之れが太陽の運行と密接に關係するものであることを知り、更に進んで此の太陽の運行は毎年の夏七月の曉天に巨星シリウスの出現するのを見ることによつて最も精密に決定し得る原理を發見したと傳へられる。

此の因縁から見ると、ナイル河はエジプトの父であると共に、又、世界の天文学を生み出した母である。そして、昔しも今も、ナイル河は、やはり、同じ河筋に無限の水をたゞへ、黙々として流れつゞ、其の水量は、高く低く、昔しながらの年週變動を見せてゐる。

最近報によると、昨1938年度のナイル河の氾濫は實に50年ぶりに大きい水量を齎した由。抑も、このナイル河は、源を赤道直下のギクトリヤ湖に發し、所謂“白ナイル”の名の下に幾多の水流を合はせ、更に中途に於いてエチオピアの山々から發する“青ナイル”の河水をも加へて、遠く地中海に注ぐ、舊大陸第一の大河であるが、“白ナイル”の水量が年中殆んど一定してゐるに反し、青ナイル”はエチオピア地方の雨量の關係上、毎年夏期には著しく水量を増し、之れが畢竟むかしからの有名なナイル河の氾濫として、下流の社會に脅威を與へるものである。今は昔と違ひ、ナイルの全流域にわたり、治水の技術が開け通信の道も完全し、エチオピアの山中の觀測所から豪雨の警報を發すると、アスワンあたりでは二週間も以前に増水の豫知を可能ならしめる。又、其のほかソバト、ロジレス、カールトゥム、アトバラ、ハルファ、アスワン、カイロ

あたりの要所々々には極めて學理的な水流研究所が設けられ、殆んど生物を取
り扱ふ如き綿密さを以て、ナイル河は調査されてゐる。

歴史に徴すると、ナイル河の水量が測り始められたのは西歴紀元前3600年頃
であり、又、中世、アラビヤ民族がエジプトの國土を征服して間もなき西歴
622年からは、カイロ市附近にニロメータが置かれた。此うした他に比類無き
長年月の研究材料により、先年來、英國の H. H. Turner, J. H. Craig, C.
E. P. Brooks 氏等はナイル河の水量の週期變動を研究して、2年乃至246年の
種々の週期を發見した。此等の複雑な現象の眞の原因が果して何であるか？
今は未だ明らかなではないけれど、少なくとも其の大部分は萬象の因である太陽
の活動に歸すべきは言ふを待たない。即ち、人類の文化史を通じて、大ナイル
の研究は、結局、太陽より出でて、太陽に歸するものと言ふべきか！

〔211頁より續く〕

で此星と相對して居る自分だつた。然も一アマチュアの身で幸にも此星と御眼
にかゝれた自分を、有難くも思つた。

適當な圖さへあれば、5⁰/M 級の器械でも見得る事と思はれるから、是非會
員諸氏も試みられる事を御薦めする。(津留肇雄)

本部・岡山・神戸・大阪・京都各支部合同大會

『倉敷天文臺見學と講演會』

1. 日時 六月3日22時より(晴雨不論)

1. 會場 倉敷市倉敷天文臺(本部所在地)

1. 集合場所・時刻 (倉敷迄各自片道) (切符を購入の事)	{	京都方面	京都驛	(第一) 17時02分發	{ 左記に乗車不能の方は 第111列車倉敷着22時 48分にて御越し下さい
		大阪方面	大阪驛	(第二) 17時48分發	
		神戸方面	神戸驛	(五) 18時26分發	
			倉敷驛	(五) 21時30分着	

1. 大會 1. 「天文と大陸政策」

會長 山本一清先生

1. 「各支部交驛座談會」

司會 水野千里先生

1. 「見學觀望會」(曇雨天中止)

指導 岡林滋樹先生

散會後當夜倉敷市内にて一泊、翌4日大原美術館・農研・鷺羽山(國立公園)・後樂園
(日本3公園)等見學の上20時頃京阪神に歸着、費用は旅費・前泊・食事・雜費等一切にて
約10圓(大阪よりの豫定)。